The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 『ISO13611:2024 通訳-コミュニティ通訳のための要求事項および推奨事項』認証取得のための言語運用能力を測る言語別適正テスト問題（英ー日、露ー日、葡ー日、中ー日）の作成 : 2024年度共同研究報告書および実践資料 |
| Author(s) | 林田, 雅至; 佐藤, 晶子; 大西, 博子 |
| Citation | 教育メソッド・教育コンテンツ研究報告書. 2025, 2024年度, p. 1-20 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/103069 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

令和 7 年 4 月 6 日

# 2024 年度 ISO コミュニティ通訳認証言語チェック「適正テスト」

# 中国語版　実施報告

大西博子

## １．実施概要

### 1.1　実施日程及び受検者・合格者数

コミュニティ通訳認証言語チェック「適正テスト」中国語版は、2024 年度において以下の日程（表 1）で実施した。受検者は延べ 41 名（実人数 38 名）、合格者は 21 名であった。全体の合格率は約 51%、概ね 2 名のうち 1 名が合格したという結果であった。

表 1．実施状況

| 回 | 実施日 | 時間 | 場所 | 使用版 | 受検者数 | 合格者数 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 6 月 26 日（水） | 17:50～19:20 | R651 | Ver.0 | 33 名 | 18 名 |
| 2 | 11 月 30 日（土） | 13:20～14:50 | R641 | Ver.1 | 8 名 | 3 名 |
| 計 | | | | | 41 名 | 21 名 |

### 1.2　受検者と合格者の内訳

受検者と合格者の内訳は表 2 のとおりである。1 年次受検者 7 名、合格者 3 名、2 年次受検者 10 名、合格者 7 名、3 年次受検者 10 名、合格者 4 名、4 年次受検者 11 名、合格者 5 名であった。その他、1 回目の受検者には、大学院生（博士前期課程）2 名と教員 1 名が含まれていたが、合格者は大学院生 1 名、教員 1 名であった。

表 2．受検者と合格者（学年別）

| 項目 | 回 | 1 年次 | 2 年次 | 3 年次 | 4 年次 | その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 受検者 | 1 回目 | 5 | 6 | 9 | 10 | 3 |
| | 2 回目 | 2 | 4 | 1 | 1 | 0 |
| | 計 | 7 | 10 | 10 | 11 | 3 |
| 合格者 | 1 回目 | 3 | 5 | 4 | 4 | 2 |
| | 2 回目 | 0 | 2 | 0 | 1 | 0 |
| | 計 | 3 | 7 | 4 | 5 | 2 |

各学年における合格率を見ると、1 年次 43%、2 年次 70%、3 年次 40%、4 年次 46%であり、2 年次が最も好成績であったと言えるが、この結果は、中国語を母語とし、かつ日本語もネイティブ級に使用できるという所謂「バイリンガル話者」が、2 年次の受検者に多く含まれていたことに起因すると考える。実は受検者の 9 割は、中国ルーツの学生であったが、彼らの中国語学習歴（使用歴）は様々で、家庭言語として中国語を使用している（或いはしてきた）という者から、中国と日本の双方の学校教育を受けてきたという者まで多種多

様に存在する。よって、彼らの中国語レベルも片言レベルからネイティブレベルまでと幅広く、日本語においても同様に授業で困らない程度に身につけている者からネイティブ級に身につけている者までと幅広い。適正テストでは、中国語と日本語による双方向の言語運用能力が求められることから、バイリンガル話者の比率の多寡が合格率に影響したと考えられる。

## ２．テストの構成、形式、内容

### 2.1　テストの構成と形式

1 回目は、大阪観光大学で使用されたテスト（佐藤晶子・小森三恵・林田雅至 2023）で実施された（以下「Ver.0」と称す)。テストは問題 1 から 4 までの全 4 問で構成され、各問題にはセクション 1 とセクション 2 の 2 つのパートに分かれる。また出題は、紙媒体（問題用紙）ではなく、PC モニタの画面を使って行われ、各問題の冒頭には、中国語または日本語による文章（録音音声）が音読される。その際、受検者は手元に用意されている紙にその内容を書き取ることができる。その後、受検者は画面に提示される設問を読みながら、各自の書き取りに基づいて解答する。ちなみに Ver.0 のセクション 1 の設問は、読まれた文章中の語彙や表現として正しいものを画面に表示される 4 つの選択肢（a～d）から 1 つを選び、所定の解答用紙に選んだ記号を記入するという形式であった。設問は 10 題ごと画面に表示され、表示されている時間には制限があり、一定の時間が経過すると画面は自動的に次のページに進み、前のページには戻れない。問題の解答には各自の書き取りが頼りとなるため、音読中に必要な情報をいかに正確に書き取れるかが合格につながる最大のポイントとなる。

### 2.2　Ver.0 の出題内容と設問形式

Ver.0 では、各問題の冒頭で中国語または日本語による文章が音読され、セクション 1 では前述したとおり、読まれた文章中に用いた語彙として、正しいものを選択解答するという設問、セクション 2 では読まれた文章の翻訳文が提示され、その文の空欄箇所に入れる適切な語彙を選択解答するという設問であった。解答は、紙媒体の用紙に選択した記号（アルファベット）を記入するという方法が採用された。

音読は、中国語も日本語も 3 回ずつ行われ、1 回目と 3 回目は普通の速さ、2 回目は書き取れる速さであった。また出題内容は、気候変動・生態系保全（問題１)、自然災害・紛争（問題２)、感染症（問題３)、観光（問題４）といった分野に関わるものであった。

出題総数は 140 題、そのうちセクション 1 が 40 題、セクション 2 が 100 題であった。各問題のセクションにおける出題数は統一されておらず、多いセクションで 36 題（問題 4 セクション２)、少ないセクションでは 5 題（問題 2 セクション１）であった。試験時間は 90 分であったが、セクションごとに制限時間が設けられ（表 3)、一題につきセクション 1 では 24 秒～1 分、セクション 2 では 27 秒～34 秒の配分で制限時間が設定されていた。すべての制限時間を合わせると 68 分 30 秒となり、平均すると一題につき約 30 秒の解答時間が与えられていたといえる。

表 3. Ver.0 の出題内容と設問形式

| 大問 | 出題内容 | セクション | 出題数 | 制限時間 |
|---|---|---|---|---|
| 問題 1 | 気候変動・生態系保全 | 1 | 10 題 | 5 分 |
| | | 2 | 16 題 | 9 分 |
| 問題 2 | 自然災害・紛争 | 1 | 5 題 | 5 分 |
| | | 2 | 28 題 | 13 分 30 秒 |
| 問題 3 | 感染症 | 1 | 10 題 | 5 分 |
| | | 2 | 20 題 | 9 分 |
| 問題 4 | 観光 | 1 | 15 題 | 6 分 |
| | | 2 | 36 題 | 16 分 |
| 計 | | | 140 題 | 68 分 30 秒 |

### 2.3 Ver.1 の出題内容と設問形式

2 回目は、京都外国語大学専用使用版(Ver.1)で実施された。テストの構成は 1 回目(Ver.0)と同じであったが、出題内容や設問形式に変更が見られた。最初の変更点として、セクションごとに録音音声が流れるという形式になった点が挙げられる。セクション 1 では単語・フレーズが 1 回音読され、セクション 2 では文章が 2 回音読される。音読はすべて普通の速さに統一され、セクション 1 では、10 題の語彙が音読され 1 題ごとに 2 秒程度のポーズが設けられた。またセクション 1 の設問は、読まれた語彙の訳として正しいものを選択解答するという形式に変更された。なおセクション 2 は Ver.0 と変わらず、読まれた文章の翻訳文の空欄に入れる適切な語彙を選択解答するという設問であった。解答には回答フォームが使用され、選択した記号（アルファベット）をタップするという方法に切り替わった。

出題内容は、問題 1 は医療・感染症、問題 2 は学校・教育、問題 3 は行政（災害)、問題 4 は行政（税金）に関わるものであった。出題数は、セクション 1 では Ver.0 と同じく 40 題であったが、セクション 2 は 80 題に縮小され、出題総数は 120 題になった。また各問題のセクションにおける出題数も統一化が図られ、セクション 1 では 10 題、セクション 2 では 20 題が用意されていた。制限時間もセクションごとに均等化され、セクション 1 は 3 分、セクション 2 は 9 分となり、一題につきセクション 1 では 18 秒、セクション 2 では 27 秒の配分で制限時間が設定されるようになった。よって、全体の制限時間は 48 分となり、Ver.0 よりも 20 分以上短縮、平均すると一題につき 24 秒の解答時間になった。

表４．Ver. 1 の出題内容と設問形式

| 大問 | 出題内容 | セクション | 出題数 | 制限時間 |
|---|---|---|---|---|
| 問題１ | 医療・感染症 | 1 | 10 題 | 3 分 |
| | | 2 | 20 題 | 9 分 |
| 問題２ | 学校・教育 | 1 | 10 題 | 3 分 |
| | | 2 | 20 題 | 9 分 |
| 問題３ | 行政（災害） | 1 | 10 題 | 3 分 |
| | | 2 | 20 題 | 9 分 |
| 問題４ | 行政（税金） | 1 | 10 題 | 3 分 |
| | | 2 | 20 題 | 9 分 |
| 計 | | | 120 題 | 48 分 |

## ３．評価基準と言語能力カルテ

### 3.1　評価基準

テストの評価基準は、総得点を 100 点(%)とし、90 点以上を S 評価、80 点以上を A 評価、70 点以上を B 評価、60 点以上を C 評価とし、59 点以下は D「不適格者」と見なす。また総得点は、ヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR）に基づき、90 点以上は C1 以上、80 点から 90 点未満は B2 以上、70 点から 80 点未満は B1 以上、70 点未満は B1 以下と評価される。ちなみにテストの合格ラインは総得点 80%以上、つまり CEFR の B2 レベル以上に達していることが条件である。例えば Ver.0 では、140 題中 112 題の正解で合格となった。

### 3.2　言語能力カルテ

テストの結果は、「言語能力カルテ」と称される評価表を受検者全員に手渡すという方法で伝達された。このカルテは、ISO コミュニティ通訳認証言語能力審査官大阪大学名誉教授林田雅至先生の監修のもとで発行された。その体裁は図 1 の通りである。受検番号と氏名欄の下に総得点と評価（CEFR レベル）が記載され、その下に各問題のセクションごとの得点率（百分率）が表示される。この得点率は、分野別領域における能力の目安となる。例えば Ver.0 では問題 1 と問題 3 のセクション 1 は、中国語によるヒアリング能力が測定されたが、見本の得点率（図１）では、問題１の気候変動・生態系保全領域は 100%、問題３の感染症領域は 90%であったことから、どちらの領域においても高いレベルに達しているが、感染症領域で測定能力(中国語ヒアリング)がやや劣ると判断できる。ちなみに Ver.1 では、問題１と問題３のセクション１の測定能力は、「中国語から日本語へのクイックレスポンス（聴解)」という名称に変更された。

言語能力カルテは以上の項目の他、中国語から日本語への翻訳力（中国語ヒアリング得点＋日本語訳得点）と日本語から中国語への翻訳力（日本語ヒアリング得点＋中国語訳得点）の両者の得点差も評価の対象となる。この得点差は、Contextual Sensitivity（文脈を汲み取る感性）のバランスを測る指標とされ、その差が 0 点から 0.25 点未満を S 評価、0.25 点から

0.5 点未満を A 評価、0.5 点から 0.75 点未満を B 評価、0.75 点から 1.0 点未満までを C 評価とし、1.0 点以上の差のあるものは D「不適格者」と見なす。これは適正テストが、「外国語教育・学習を相対化し、媒介語＝学習者母語・文化の重要性を強調し、Contextual Sensitivity に基づく双方向性運用能力（interactive competence）の涵養に力点を置いている（林田雅至 2023:26）ことにより設置された評価基準である。つまり適正テストでは、言語の産出能力（母語から学習言語へ）と受容能力（学習言語から母語へ）のバランス力も評価される仕組みになっている。見本（図１）の言語能力カルテの最後の一行には、AS と 2 文字のローマ字で全体評価が記載されているが、最初のローマ字は総得点による評価、その後ろのローマ字は言語の産出能力と受容能力の差による評価である。こうした双方向の言語運用能力のバランス力を評価する点は適正テストの特徴であり、他の語学検定試験では類を見ない評価方法である。

図１．Ver.0「言語能力カルテ」見本

受検番号(学籍番号)：202XXXX　　氏名：XXXX
総得点：89 点（評価：CEFR：B2 以上）
問題 1：**気候変動・生態系保全**
　　中国語ヒアリング：1.00 点(100.0%)、日本語訳：0.81 点(81.0%)
問題 2：**自然災害・紛争**
　　日本語ヒアリング：1.00 点(100.0%)、中国語訳：0.86 点(86.0%)
問題 3：**感染症**
　　中国語ヒアリング：0.90 点(90.0%)、日本語訳：0.75 点(75.0%)
問題 4：**観光**
　　日本語ヒアリング：0.87 点(87.0%)、中国語訳：0.97 点(97.0%)
**ヒアリング：**
中国語ヒアリング：1.90 点(95.0%)
日本語ヒアリング：1.87 点(93.3%)
**翻訳：**
中国語訳：1.83 点(91.5%)
日本語訳：1.56 点(78.1%)
中国語から日本語へ：3.46 点(86.6%)
日本語から中国語へ 3.70 点(92.4%)
両者の得点差：0.24 点(S 評価)
**全体評価：AS**

## ４．合格者と不合格者の評価の分布

### 4.1　合格者の評価と人数

適正テストに合格した 21 名の全体評価は、表 5 に示したとおりである。総得点による評価が S（SS、SB）は 5 名、A（AS、AA、AB）は 16 名であった。またバランス力による評価が S（SS、AS）は 12 名、A（AA）は 3 名、B（SB、AB）は 6 名であり、A 以上のバランス力を身につけていた受検者は、全合格者の 75%を占めた。

表 5．合格者の全体評価と人数

| 全体評価 | SS | SB | AS | AA | AB |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 回目 | 4 | 0 | 7 | 3 | 4 |
| 2 回目 | 0 | 1 | 1 | 0 | 1 |
| 計 | 4 | 1 | 8 | 3 | 5 |

### 4.2　合格者の評価と学年

21 名の合格者のうち、AS 以上の評価を得た者は 13 名、全合格者の 6 割（61.9%）を占めた（表 6）。そのうち 4 年次の取得者が最も多く（5 名）、続いて 2 年次（3 名）、そして 3 年次（2 名）であったが、最高レベルの SS 取得者は 3 年次以上に限られた。ちなみに 4 年次の合格者全員は、佐藤晶子先生の担当科目「コミュニティ通訳特論」の履修者であった。表 6 の[履]はこの授業の履修者を表し、数字は履修者数を示す。

2 年次は合格率こそ高かったものの、AS 以上の評価者よりもそれ以下の評価者の方がわずかに多かった。1 年次においても同様の結果であり、学年が上がるにつれ全体評価が高まる傾向が見られた。

表 6．合格者の評価と学年

| 全体評価 | 1 年次 | 2 年次 | 3 年次 | 4 年次 | その他 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| SS | | | 1 | 2[履 2] | 1(教員) | 4 |
| SB | | 1 | | | | 1 |
| AS | 1 | 2 | 1 | 3[履 3] | 1(院生) | 8 |
| AA | 2 | 1 | | | | 3 |
| AB | | 3 | 2[履 1] | | | 5 |

### 4.3　不合格者の評価と人数

一方、合格点に届かなかった受検者の全体評価は、表 7 に示したとおりである。総得点による評価が B（BS、BA、BB、BC）は 11 名、C（CA、CB、CC、CD）は 8 名、D（DD）は 1 名であり、B 以上の評価者が約半数（55%）を占めた。バランス力による評価では、S（BS）が 3 名、A（BA、CA）は 5 名、B（BB、CB）は 6 名、C（BC、CC）は 2 名、D（CD、DD）は 4 名であり、A 以上の評価者は 8 名（38%）、合格者の A 以上の割合（75%）と比べて半分ほどの割合であった。つまり不合格者の半数以上は、語学力の上では一定の水準（B 以上）に達していたものの、バランス力において合格ラインともいえる A レベルに

達していた者は 4 割にも満たなかった。このことから、合格を目指すには語学力以上に双方向言語運用能力のバランス力向上に力を注ぐ必要があることがわかった。

表７．不合格者の評価と人数

| 全体評価 | BS | BA | BB | BC | CA | CB | CC | CD | DD |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 回目 | 1 | 3 | 3 | 1 | 2 | 1 | 1 | 2 | 1 |
| 2 回目 | 2 | 0 | 1 | 0 | 0 | 1 | 0 | 1 | 0 |
| 計 | 3 | 3 | 4 | 1 | 2 | 2 | 1 | 3 | 1 |

### 4.4　不合格者の評価と学年

不合格者の全体評価を BC 以上と CA 以下に二分割し、BC 以上の評価の分布を学年別に見てみると、1 年次 3 名、2 年次 1 名、3 年次 3 名、4 年次 3 名、その他 1 名という結果で、特にどの学年に多く分布していたという状況は見られなかった。ちなみに「コミュニティ通訳特論」の履修者は、3 年次 2 名、4 年次 1 名であり、CA 以下の評価には履修者は含まれていなかった。

表８．不合格者の評価と学年

| 全体評価 | 1 年次 | 2 年次 | 3 年次 | 4 年次 | その他 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| BS | 1 | 1 | | 1 | | 3 |
| BA | 1 | | 1[履 1] | 1 | | 3 |
| BB | 1 | | 2[履 1] | | 1(院生) | 4 |
| BC | | | | 1[履 1] | | 1 |
| CA | | 1 | 1 | | | 2 |
| CB | | 1 | | 1 | | 2 |
| CC | | | 1 | | | 1 |
| CD | 1 | | | 2 | | 3 |
| DD | | | 1 | | | 1 |

## ５．実施の成果と今後の課題

### 5.1　成果

中国語版適正テストの実施は、京都外国語大学における初めての試みであり、どのような結果が得られるかは予測不能な状態であったが、このテストを機に本学に在籍している学生の語学力および双方向言語運用能力を測ることができた。特に中国ルーツの学生の現段階における言語能力（潜在能力）が測定できたという点は大きな成果であり、コミュニティ通訳者として活躍できる人材の発掘につながったといっても過言ではない。

初回の実施は、事前にどのようなテスト形式でどのような出題内容であるかを伝えずに受検に臨んでもらったが、31 名の受検者のうち 18 名が合格、半数以上の学生がすでに CEFR の B2 レベル以上の言語運用能力を身につけていることが判明した。特に 2 年次の合格率が高かったことは、大変喜ばしい結果であった。今後の教育（指導）次第では、彼らの潜在能

力をより高めていくことは十分可能であるし、彼らの学習成果が世界で通用するグローバルな資格につながることで、社会で活躍できる場も大いに広がると期待する。

### 5.2　今後の課題

2 回目の実施は、テスト形式の変更により、受検者の成績は初回ほど振るわなかったが、このことを機に、適正テストの合格、即ちコミュニティ通訳者として求められる人材育成には何が必要であるかを考えることができた。

適正テストでは、語学力以上に双方向言語運用能力のバランス力が求められる。受検者の約八割（78%）は、語学力の上では一定の水準（総得点 B 評価以上）に達していたものの、そのうち約三割（27%）は合格点に届かなかった。その要因は不慣れなテスト形式であったという点も否めないが、最大の要因は、双方向言語運用能力のバランス力が十分でなかった点が挙げられる。中国語がネイティブ級に話せる受検者でも合格に至らなかったのは、彼らにとっての産出能力が受容能力よりも劣っていたからであり、今後この点をしっかり強化していくことで、合格点にたどり着ける見込みは十分にあると考える。

そのための対策として、以下 2 点の推進を提案したい。一つは、スクライビングトレーニングを推し進める、もう一つは、通訳用語の習得（学習）を促すことである。「スクライビング」とは、話の内容を「まとめて表現すること」である（林田雅至・印南敬介 2018:83）。もちろんこれらの前提には、受検者自らの不断の努力が必須となることはいうまでもない。ここではあくまで大学側（指導者）として、今後なすべき課題について述べておきたい。

適正テストの解答には、各自の書き取りが頼りとなるため、音読中のノート・テイキング（Note-taking）がしっかり行われなければ合格につながらない。よって、まずは聞いたことを文字化するという習慣を定着させるトレーニングから始めなければならないが、相手の言ったことを素早く書き取るだけのトレーニングだけでは、双方向言語運用能力の向上は目指せない。多言語・多文化コミュニケーションの媒介役には、注意深く相手の発話に耳を傾け、すばやくその本質を捉え、それを瞬時に翻訳し、的確にもう一方の相手に伝える技術（高度汎用力）が要求される（林田雅至・印南敬介 2018:82）。そのためには聞いたことを単に書き取るだけでなく、まとめて表現できる力も身につけておく必要がある。スクライビングは、授業だけでなく学生の普段の学習においても推奨したい訓練方法である。

また適正テストの出題内容は、表 3 と表 4 に示したとおり大変多岐にわたる。中には行政（税金）など受検者にとってなじみのない内容も含まれ、聞いたこともないような語彙に遭遇することもあるだろう。よって、普段からコミュニティ通訳が求められる場面における知識（語彙）を増やしておく必要も十分にある。そのためには「コミュニティ通訳特論」など通訳用語を専門的に習得できる科目を履修することが大変効果的ではあるが、中には履修制限を伴う科目もあることから（例えば「コミュニティ通訳特論」は 3 年次以上が対象）、コミュニティ通訳に求められる知識が自学自習で習得できる教材があることが最も望ましい。コミュニティ通訳に求められる SDGs などに関わる内容を盛り込んだ対訳附テキストの作成は、林田雅至先生からも提案があったが（京都外国語大学 FD カフェ 2025 年 1 月 22

日開催)、授業での活用に限らず、コミュニティ通訳に興味を持つすべての学生に活用できる教材開発が目下の急務であると考える。

謝辞

中国語版適正テストの実施と言語能力カルテの作成には、京都外国語大学外国語学部中国語学科准教授楊蕾先生から多大なるご尽力を賜った。この場をお借りして心より御礼申し上げたい。

参考文献

林田雅至・印南敬介 2018「グローバル外国語教育に不可欠な「高度汎用力」の原点 : interactive competence を支える「スクライビング」実践報告」,『Co＊Design』第 3 号,pp.79-85

林田雅至 2023「クオリティコントロールとしての「適正テスト」を考える(20230802)令和５年度教育メソッド・教育コンテンツ研究第 1 回勉強会資料」,印南敬介編『ISO コミュニティ通訳認証制度実績報告書 : 2022 年度』大阪大学 CO デザインセンター,pp.26-36

佐藤晶子・小森三恵・林田雅至 2023「高等教育機関による多言語の『ISO13611:2014 通訳－コミュニティ通訳のためのガイドライン』認証取得・更新と言語運用能力の向上・維持を測る適正テスト実施についての考察：コミュニティ通訳（3)」,『大阪観光大学研究論集』第 23 号,pp.45-54

林田雅至 2025.1.22「適正テスト概説」京都外国語大学 FD カフェ発表原稿(PPT スライド)